



## 能忍寺たより



Vol.45

## 行事紹介

## ○孟蘭盆会(うらぼんえ)

孟蘭盆会(うらぼんえ)は、一般的に「お盆」の名で親しまれている仏教の重要な行事です。その由来は『孟蘭盆経』というお経に記された、釈迦の弟子である目連尊者の物語にあります。目連が神通力で亡き母の姿を見ると、彼女は餓鬼道に落ちて苦しんでいました。釈迦の教えに従い、夏の修行を終えた僧侶たちに供物を捧げて供養したところ、その功德によつて母親は救われたとされています。

この教えが日本に伝わり、古来の祖霊信仰と結びついて現在のような形になりました。新暦では8月13日前後、地域によつては「月15日前後」に行われます。期間中は「精霊棚」をしつらえ、キウウリの馬やナスの牛を飾つて先祖様をお迎えします。また、初日には「迎え火」を焚いて道標とし、最終日には「送り火」で霊を安らかにあの世へ送り出します。

孟蘭盆会は、単に亡くなった方を懐かしむだけでなく、今の自分が生かされていることへの感謝を深める貴重な機会です。家族が集まり、世代を超えて命のつながりを確認する時間は、現代においても日本の心として大切に受け継がれています。

## 今月のことば

## ○莊嚴華麗(そうごんかれい)

「莊嚴華麗」とは、おごそかで重々しく、かつ華やかで美しい様子を表す言葉です。この言葉のルーツには、仏教における「莊嚴(しょうごん)」という深い意味が込められています。

仏教での「莊嚴」とは、仏様の世界である浄土や、仏像、本堂などを、宝玉や花、香などで美しく飾り立てることを指します。これは単なる贅沢や見栄ではなく、目に見える美しさを通じて、仏様の尊さや悟りの世界の素晴らしさを人々に伝え、敬虔な心を引き出すための大切な修行の一環とされています。

現代では、建築物や衣装などが圧倒的な美しさと品格を放つている際に使われます。ただ派手なだけでなく、そこに神聖さや歴史の重みが加わった究極の美を称える、非常に格調高い四字熟語といえます。

## コラム あれもこれも仏教用語

## ○方便

「嘘も方便」という言葉で知られる「方便」は、もともと仏教において「人々を真実の悟りへと導くための巧みな手段」を意味する重要な概念です。

サンスクリット語の「ウパーヤ(近づく、到達する)」が語源で、仏様が相手の理解度や状況に合わせて、分かりやすく教えを説くための「教育的な配慮」を指します。究極の真理は言葉で伝えるのが難しいため、あえて例え話や仮の教えを用いることで、一歩ずつ悟りへ近づけるのです。

現代では「目的のための手段」というニュアンスが強いですが、本来は相手を想う「慈悲の心」から生まれる、知恵に満ちた導きを意味する言葉なのです。

## もともとは修行の言葉

## ○日常に溶け込む仏教の痕跡

私たちが日常的に使っている「玄関」や「挨拶」といった言葉も、実はそのルーツを辿ると、禅宗をはじめとする仏教の厳しい修行のプロセスに行き着きます。

まず「玄関」ですが、これはもともと「玄妙な道(仏道)への入り口」を意味する言葉でした。「玄」は奥深い真理を指し、悟りの世界へ入るための第一歩となる門を「玄関」と呼んでいたのです。かつては寺院の門を指す特別な言葉を指す一般的な言葉として定着しました。私たちが毎日通り抜ける場所には、実は「真理を探究する入り口」という厳かな響きが込められています。

次に「挨拶」です。現代では礼儀としての言葉の交わり合いを指しますが、もとは禅門における修行者同士の真剣勝負を指す言葉でした。「挨」には「押す」、「拶」には「迫る」という意味があります。師匠と弟子、あるいは修行者同士が、問答を通じて互いの悟りの深さを推し量り、心を開いてぶつかり合うことを「挨拶」と呼んだのです。一瞬の油断も許されない、精神の火花を散らすようなやり取りがその語源となっています。

このように、何気なく口に出ている言葉の一つひとつには、かつての修行者たちが「今、この真理を追い求めた情熱や、覚悟の跡」が刻まれています。言葉の背景にある修行のプロセスを知ること、いつもの景色や何気ない交流も、少しだけ違った深みを持って感じられるのではないのでしょうか。